不定期刊行　　第523号　2014.09.25

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

御嶽噴火に思う

「御嶽、乗鞍、駒ヶ岳、浅間は殊に活火山、いずれも国の鎮めなり」長野県民なら誰でも口ずさめる信濃の国の一節である。「信濃の国の鎮め」死火山とされていた御嶽が有史以来初めて噴火したのは、僕が大学１年の時であった。その御嶽が30幾星霜の時を経て大噴火した。噴火の規模は前回と同じ程度というが、よりによって最もタイミングが悪かった。

今夏は悪天続きだったが、夏登れなかった憂さを晴らすかのように、秋山はどこへ行っても大賑わいだ。日帰り登山が主流の御嶽は、紅葉の一番見ごろを迎え、土曜日の昼という一番人が集中する時間帯だった。折しもこの日は雲一つない快晴という絶好の登山日和。山頂で弁当を広げて食べている最中の人、登りついて絶景を眺めている人、山頂を吹く爽やかな風に癒されていた人・・・。歴史に「もし」はありえないが、しかし、もし平日だったら、もし冬の時期だったら、もし夜中だったら、もし雨が降っていたら・・・。これらの条件が一つでも違っていたら、恐らくこれほどの大惨事にはならなかったのではないだろうか。

この日、御嶽登山を計画していた人は、個人的な状況がない限り、山に向かったはずだ。こうして紅葉シーズンたけなわの、噴火は、戦後最悪の火山災害をもたらした。映像で見る御嶽はまるで雪を纏った冬の姿と見まがうばかり。しかし、その美しさとは裏腹に多くの貴重な命が失われた。かつて木曽高校に勤務していた１１年間に、僕は何度御嶽を訪れただろう。その大きな山懐に抱かれる心地よさを味わうために。

確かに山はいつも笑顔で迎えてくれるとは限らない。四季折々、時には、風雨や雪で厳しい顔で迎えてくれた御嶽ではあるが、まさか火を噴くとは、まさに想定外のことだった。しかし、これが自然の脅威なのだ。

田ノ原から王滝頂上に登りつめ、頂上山荘を回り込むと、八丁だるみを挟んで、剣ヶ峰は指呼の間。その左手の火口からはこれまでも噴煙があがっており、風の通り道である八丁だるみを通るときは、異臭がしていた。今回犠牲になられた方々の多くはこのあたりで、災難にあったらしい。破壊された王滝頂上山荘や、廃墟と化した要塞のようにも見える剣ヶ峰頂上山荘の映像を見るにつけ、被害の大きさを知らされる。噴火後、5日を経過してなお、全容がつかめず、救出がすすまないもどかしさ。その中で、ガスと火山灰に行く手を遮られながらの懸命な救出作業が続いている。噴火の前駆現象である火山性微動については、知らされていなかった。しかし、それが出されていたからと言って、何になろう。登山者として我々は、ここから何を学べばいいのだろうか？あまりにも痛ましい代償と引き換えに感じさせられるのは、人間の営みの小ささである。

犠牲になった方々に心からご冥福を祈るとともに、これを肝に銘じながら、さて、山登りとして僕らがこの事故から教訓を引き出すとしたらどんなことがあるだろうか？今回のような予測不能の事態にはなすすべもないが、せめて火山に登るときは、天気予報

を見るのと同じ感覚で、入山前に気象庁などの情報をチェックすることは心がけたいと思う。そして、もう一つ当然のことであるが、登山計画書は不可欠のものだと改めて感じた。今回の噴火をおごり高ぶった人間への警告とも捉え、もう一度自然と向き合いたい。謙虚に、そして臆病に。

他県、また海外からも多くの方々からご心配をいただいております。その方々にお礼を申し上げるとともに、まだ山に残されている方々が、一刻も早く帰宅を心待ちにしておられるご家族のもとに帰れることをご祈念申し上げます。

＊添付した写真は、昨年9月21日中信新人大会の時、御嶽剣ヶ峰から乗鞍越しに北アルプスを眺めたもの。乗鞍の陰に焼岳があり、一直線に火山が並んでいるのがわかります。

長山協キャンプＩＮ廻り目平・・・大町高山岳部も参加

御嶽が噴いた日、大町高校は、長野県山岳協会の遭対、指導両委員会主催の長山協キャンプに合わせて、川上村廻り目平でクライミングを行っていた。長山協キャンプは今年で28回目を迎えたが、傘下の団体に呼び掛けて行うクライミングやレスキューの研修会。昼は技術交流を行いながら、研修を行い、夜は焚火を囲んでトン汁と持ち寄った酒肴で交流を深める。新人戦やテストなどの絡みでここ数年、高校生を連れての参加はしていなかったが、今年は生徒とともに参加した。

高校生にとっては、未来の自分の姿でもある社会人の山岳会との触れあいであり、大人にとっては若き日の自分の姿に重ねながら様々な思いを語る機会となった。高校生にも大人にも共通の話題で話せるこういう機会は貴重であると感じた次第。

大町の生徒たちには、25日はボルダ―、26日はマルチピッチを体験させた。25日ボルダ―は大賑わい、やり始めたところで「大西先生！」と声を掛けられたので、誰かと思うとピオレドール受賞者のジャンボこと横山勝丘さん。謙虚なジャンボと一緒にボルダ―に取り付いた生徒たちはここでも大きな経験。翌26日は高校生ながら諏訪山岳会に入会している清陵高校のO君も交え、ガマスラブを上部まで３ピッチ登った。青空に向かってフリクションを利かせてスラブを登って行く爽快感を生徒たちと満喫した。

編集子のひとりごと

御嶽が噴いた日、南信高体連では、八ヶ岳西天狗岳で新人戦の真最中だったそうだ。以飯田高校杉山さんからの報告。・・・西天狗岳山頂で昼食中（12:00）、偶然私、御嶽方面（雲海で御嶽は見えず）の雲海の上に、立ち登る異様な雲を発見。池迫さんらに変な積乱雲が出ていると告げ、生徒らにも告げ、冗談で「御嶽噴火」なんて言っていたところ。まさか本当に噴火だったとは驚きです。（天狗にもどり、他の登山者の情報から知る）

また、王滝小中学校に勤務されている沼田さんによれば、学校の校庭は自衛隊の車両基地になっており、生徒たちは毎日マスクをして登下校、噴煙の影響に配慮しながら学校生活を送っているとのことです。（大西　記）